

身も蓋もない歌 佐佐木定綱

穂村弘氏の『ぼくの短歌ノート』（講談社）を読んだ。文芸雑誌「群像」に現在も連載されている「現代短歌ノート」を一冊にまとめたものである。

毎回ひとつテーマ立てがあり、それに沿って近現代の有名歌人から投稿歌まで、幅広い歌が扱われている。「賞味期限の歌」「日付の歌」「身も蓋もない歌」「張り紙や看板の歌」「殺意の歌」などの身近なテーマから、「ちやらちやらてふてふ」（旧かなの歌）「今と永遠の通路」「システムへの抵抗」「永遠の顔」など、文芸誌らしいテーマなどもある。

一番初めに「コップとパックの歌」ときて、一体なんのことだ」とつい読みはじめた。思うつぼである。

・ハブられたイケてるやつがワンランク下の僕らと弁当食べる

うえたに

「身も蓋もない歌」というテーマからの一首。「学校という閉鎖空間におけるカースト制度の残酷さを読み取ることができる」とし、さらに「ここには死の凝視も社会への批評もユーモアらしきものも見当たらない。その代わりに独特の感触がある。強いて言語化すれば、「僕」の表情がみえない、ということになるだろうか。」としている。

・よくわからないけど二十回くらい使った紙コップをみたことが

ある

飯田有子

こちらは「コップとパックの歌」の一首である。「作者の考えとか、作中主体である〈私〉の喜怒哀楽とか、だからなんだとかいうことが、ここには一切書かれていない。唯一の思いと云えそうなのは「よくわからないけど」ってところだ。」とし、「使いたまれた器」ではなく「使い捨ての紙コップ」を使う社会システムの中で、自らも年をとったとき「ぼろぼろの紙コップの老人」になつてしまふのではないかと解釈している。

これらのように一読でもなにを歌っているかわかりやすい歌が多いため、短歌を知らない人でも読みやすい。興味を持ってもらえることは重要であろう。

挙げた二首について、共に作中主体が見えないという指摘がある。確かに見えない。ただ、これは見えないというより、それ以上先へ踏み込むのをやめているとも読めるのではないか。

「ハブられたイケてるやつ」は決して「僕ら」のランクには入らない。たとえ一緒に弁当を食べていたとしても。そんな「僕」は「ハブられたイケてるやつ」に対してなんの感情も抱かない。ランクが違うやつにそれ以上踏み込んでも意味がない。うまくいけば元に戻るか、だめでもワンランク下に見ていた「僕ら」の中には来ないと思っている。

「二十回くらい使った紙コップ」は気にはなるが、「よくわからない」と、それ以上先へ進むことをやめている。

「ハブられたイケてるやつ」も「二十回くらい使ったコップ」も気になるが、それ以上は踏み込まない。独特の他者との関係性がそこにはあると思つた。